

Hunt the Tortoise  
1950  
by Elizabeth Ferrars

目次

亀は死を招く

5

訳者あとがき  
267

## 主要登場人物

- シリア・ケント……………イギリス人ジャーナリスト  
マイケル・バトラー……………徒歩旅行中の自称イギリス人  
ムッシュュー・オリヴィエ……………ホテル・ビアンブニユの元支配人  
マダム・オリヴィエ……………ホテル・ビアンブニユの元支配人の妻  
ジャック・オリヴィエ……………オリヴィエ夫妻の息子。ホテルの現支配人  
クローデット・オリヴィエ……………ジャックの妻  
ジュヌビエーブ……………ジャックとクローデットの娘  
ジーン……………ホテルのウエイトレス  
ピエール・ジャメ……………カナダ人ダイバー  
ルース・ジャメ……………ピエールの妻。同じくカナダ人  
バーティー・ファンダクリアン……………アルメニア人の闇商人  
ムッシュュー・バレ……………六人の子持ちの株式仲買人  
ムッシュュー・ヴァイアン……………パリの宝石商  
マダム・ヴァイアン……………宝石商の妻  
マダム・ティシエ……………パリの仕立屋  
ポール・スタイン……………謎めいたスイス人  
マグダ・スタイン……………ポールの妻  
パトリス……………カフェのオーナー  
ジジ……………ムッシュュー・バレのベットの亀

## 第一章

列車がラ・マレットで停車すると、シーリア・ケントはプラットホームに降り立ち、物珍しそうにまわりを見回しながら立ち尽くしていた。つまるところ九年というのは長い歳月だった。それでもあたりに漂う松やギョリュウやローズマリーの濃厚な香りに気がつくのと、匂いというものが、長い時間を経て欠落した記憶を埋めることもあるとわかった。

彼女は鞆を二つ持つと出口へと向かった。薄い綿のワンピースを着た小柄な娘に切符を渡して、道へ出た。とうとう着いたのだという思いに、いくらか勝ち誇った気分を味わっていた。もつとも歩きだすとすぐに、その村は思っていたよりもずっと遠そうだとわかった。道も、こうと思えば込んでいたものとはちがいがい、見覚えがないように思われた。急に不安感に襲われた。自分が（ホテル・ビアンブニユ）を訪ねても、その場にいる誰も彼女に気づかないのではないかと。マダム・オリヴィエですら。現に、ホテルへと続く階段を昇りつめたところに立っていたジャック・オリヴィエは、シーリアが階段の下に現れたのを見ても、何ら彼女と気がついた様子はなかった。それに、彼女がホテルに入ってきて来ようとしているとも思わなかったようだった。彼女を一瞥すると、彼の関心は一緒にいた二人の男に戻っていった。

一人は小柄で白髪混じりの、神経質そうな凡庸な男で、もう一人はどっしりとした筋骨たくましい

男だった。二人ともレインコート姿で、手に鞆を持っていた。

シリアはまる一日以上も旅をして来たので、疲労と興奮とで神経が張りつめていて、つい鞆を地面に落としてしまった。咄嗟にジャックが駆け寄って来てくれることを期待したが、男ぶりのいい浅黒い顔には何の関心も読み取れず、彼女はひどくがっかりした。

シリアには一目見てジャックだとわかっていた。彼は、十六歳の少年だった頃を知っている者なら誰しも予想がつくような、すこぶるつきのハンサムな若者に成長していた。中背でどちらかと言えばがっちりとしており、均整のとれた逞しい体つきをしている。肌は夏の日差しで真つ黒に焼けていた。黒みがかった髪は短く刈りこまれ、格好のいい頭が露あらわになっている。顔の造作は小さめでよく整っていた。少年の頃にはいくぶん備わっていた慈悲心あはれが失われ、無慈悲がそれに取って代わっていたとしても、だからといって魅力的でなくなつたということはないようだ。彼は青い綿のワイシャツを着て、袖をまくり上げて襟を開けており、米軍のパンツを穿いて、足元は白いエスパドリーユという格好だった。

彼と一緒にいた二人の男のうちの小柄なほうが彼の手をつかんでいた。

「わたしたちが心から感謝していることはわかってください」と男は言った。「あなたはわたしたちに新しい人生への希望をくれました。あの借金はわたしたちには到底返せない額でしたから」

シリアの耳に飛び込んだできたのは驚くような言葉だった。もともと文脈から言えばひどく感情のこもった言葉だったのに、その口調はいたつて熱のないものだった。男は精神的に疲れ切っているらしく、そのせいで感情というものが枯渇してしまっているようだった。

「いえ、いえ」と、奇妙な冷淡さでジャックは答えた。「僕は何もしていません」

「幸い、二度とあなたを煩わせることはないでしょう」ともう一人の男が言った。「わたしたちは決してあなたに絵葉書なんか送ったりしませんから」

この言葉にジャックは、まるでそれが意味不明なジョークでもあるかのように、不安げに声を立てて笑った。「そんな、もちろん僕はあなたたちのことは気がかりですよ」彼はそう言いながらも、どちらの男も見えてはいなかった。「でもおそらく、それに越したことはないでしょう。やはり——」  
「もちろんです、もちろんです」と小柄な男がうんざりしたように答えた。「これきりご迷惑をおかけするつもりはありません……」

そのときシーリアの立てた何かの物音に、男たちはみな見知らぬ女がまだ階段の下にいたことがついたようだった。

ジャックが彼女を不審そうにじろじろ見た。シーリアは、少年の頃の彼の顔にいくぶん気難しげな疑り深さがあったことを思い出した。それは愛情深い母親に甘やかされている息子にはごく普通のことのように彼女には思えたものだったが、彼は今でもまだそうなのだと気づいた。

「あなた、ジャックでしょ、そうよね？」と彼女はためらいがちに切り出した。言ってしまったから、ムツシュ・オリヴィエと呼ぶべきだったのと思った。

最初、彼には何の反応もなかった。無意識に眉をひそめた以外には。だがじきに彼女の口調に、彼女が何者なのか思い当たったようだった。階段を駆け降りてきて、彼女の両手をとると、興奮して振り返りながら大声で言った。「マドモアゼル・ケント！ きみだとはわからなかったよ」彼はいくぶん後ずさると、目に笑みを浮かべながら彼女をためつすがめつした。「だけどどうしたらきみだとわかるっていうんだ？」

「今日わたしが着くことになつてるの、あなた知らなかったの？ わたしの手紙は行方不明になつちやうた？」

「もちろんきみが到着することは知つてたよ。でも、まったくちがう人を捜していたんだ。短いワンピースを着た、シヨートカットですつびんの女の子をね。そしたらそのうち、ついさっきのことだけど、たまたま別のことが持ち上がつてそれに気を取られて——まあ、別にたいしたことじゃないんだが。それにしても十年一昔とはよく言つたもんだ。きみはすっかり変わつてしまつたよ、マドモアゼル・ケント」

「九年よ」とシーリアが訂正した。

「九年か。十年じゃなくて……でも、何で十二時の列車で来るって教えてくれなかつたんだい？ 車で迎えに行つたのに。さあ、ともかく中に入つて。さぞ疲れただろう」

「急を要することなのにわたしが邪魔をしちゃ悪いわ」とシーリアは言つたものの、見上げると男たちはすでにその場を離れてテラス伝いに移動して、彼女に背を向けて立つている。「ちよつとわたしの鞆を持つてもらえたら——」

「いや、急を要することなんかじゃないんだよ。別に何でもないんだ。さあ来て」ジャックは彼女の鞆を持ち上げると、階段を昇りだした。

シーリアは彼のあとに続いた。だが階段を昇り切ると、息をのんで立ち尽くした。テラスからは、カーブを描いている港の全景が一望できた。港は低くて赤い崖に囲まれており、その崖に沿つてエメラルドグリーンの松の木々が茂つていた。松の木々の間にはピンクや薄紫色や黄色の家があつた。屋根の色は赤さんご色で、窓のシャッターにはけけけけしい塗装が施されている。小さい湾の入り口に

は防波堤が突き出しており、湾内のガラスのように澄み切った青い海に、漁船が並んでいた。一隻の船がちょうど積荷を降ろしているところで、埠頭にいる鮮やかな色の服を着た女たちが、そのまわりに群がっていた。漁師たちが、女たちの持つているざるに魚を流し込むと、魚は陽光を受けて銀色にきらめいた。荒っぽい掛け合いの声がテラスまで届いてきた。

「それでも実のところ少しも変わってないのね」シーリアはテラスのまわりの木の柵に寄りかかりながら疑わしげに言った。「マダム・オリヴィエは、何もかもすっかり変わってしまったと、手紙に書いてらしたけど。ひとつには、ドイツ人たちがこの一帯の半分を爆破してしまったからだって。だからわたし、こんな景色をもう一度見られるなんて夢にも思わなかったわ」

「もう被害にあったものはあらかた修復されたんだよ。だいたい以前と同じように見えるところにはね。だけど、わからないかい？ 防波堤が新しいのが。去年、やっと工事が終わったばかりなんだ。それに、ここから見える家はほとんどが玄関部分を破壊された」

「あのホテルもなの？」

「ああ、そうだ。うちのホテルもだ」

「誰もそうは思わないでしょうね」窓に緑色の長いシャッターがついていて、一方の壁に鮮やかな青いペンキで〈ホテル・ピアンブニユ〉と描いてあるその白く長い建物は、太陽の日差しの中で目がくらむほど際立っており、シーリアの記憶の中にあるものとそっくり同じに見えた。当ホテルの名物はラングストイセエビですという、心をそそられる謳い文句まで昔と同じようであった。「それがあったのはいつのことなの？」

「ドイツ人たちがここを引き払ったときだ。彼らはここにいた間は、そう行儀が悪いことはなかった。



なにぶんきわめて厳しくしつけられていたからね。ところが、退却する段になると、ひとつ残らず破壊しようとしたんだ」

「ただこの港は、誰にとつてもたいして有益ではなかったんでしょ？」

「そのとおりだ」

「漁船より大きい船は入って来られないんですものね」

「そうさ。嫌がらせでしかないよ」

「おかしいわ」

「ここはおかしな世界なんだよ、マドモアゼル・ケント」

シーリアは彼をちらりと見やった。彼が口先だけでそう言っているように思えたのだ。ただ猫も杓子もそう言っているだけのこと、彼にとつてはおかしな世界であることにことさら意味があるわけではなく、彼は自分のことで頭がいっぱいで、ほかのことなど考えられないように見えた。

「そこに泊まってるあの二隻の船は何なの？」シーリアは、港に泊まっているほかの船よりはかなり大きい二隻の船を指さした。「漁船ではないわよね？」

「あれは、沖にある難破船で作業をしているダイバーの船だよ」とジャックが答えた。「今日はミストラル（地中海沿岸に吹き降ろす乾燥した寒冷な北西の強風）のために、彼は海に出られなくてね。もうかれこれ一週間近く吹いているよ。今日は昨日よりはましだけど、いつもたいてい今頃の時間になると天候が悪化する。明日から村の祭りが始まるんだが、決まって天気が悪くなるんだ。たいがい嵐になってね」

「あのお祭りね——以前はそのためにここに来たものだったわ」シーリアはそう言って微笑んだ。「ダンスがあつたわよね？ それからスポーツや模擬の闘牛も？ それに、あなたのお母さんの聖名

祝日（カトリック教団で、自分の名をとった聖徒の祝祭日で、誕生日のように祝う） も同じ日だった。マダム・オリヴィエはどうしてらっしゃる？ お元氣？

「ああ、まあ、元氣だよ」

彼の口調には、何かわけがあつてそれ以上の詮索は差し控えたほうがよいと思わせるものがあつた。「わたし、よくあなたのお母さんのことを考えてたの」

「ああ、そうだね、きみはこの祭りが好きだったね。確かにとても美しくて素晴らしい祝日だよ。ただ、いいかい、ここには金がない。機会もない。おそらく資本があれば何かやれるんだろうが、なにせ現実ね……」と彼は言葉を濁し、不満げな表情で肩をすくめた。

「戦争が終わつてすぐこっちへ戻つたの？」

「ああ、いや、長いことここを離れていた。去年戻つて来たばかりだ」

撫でるように木の手すりに手を滑らせながら、彼女が言った。「あなたたちのことをしょっちゅう考えてたの。もう一度会えるかしらつてね」

彼がにっこり微笑んだ。彼の最大の魅力は笑顔だとシーリアは思った。その笑顔は親しげで、親切そうで、感じがよくて、およそ親切心になどあまり関心もなさそうな性格とは裏腹だったが。

「ところでムッシュ・ライドンは？」と彼が尋ねた。「彼に何かあつたのかい？ 覚えてない？ きみらが大意でここを引き払うときに、荷物に詰めるには濡れすぎてるからと言って、彼が海水パンツを置いていったのを。あそこの釘に引つ掛けて置いてつたんだよ。僕たちは何年もそれを取つてあつたんだ。ムッシュ・ライドンはそのうち帰つて来るから」と言つてね」

「でも彼は帰つて来ず——」

後ろから大きな声が聞こえた。「ジャック！ ジャック！」

シーリアがすぐさま振り向くと、ホテルの入り口のところ年に配の女性がいるのが見えた。彼女はしばらくシーリアを凝視していたが、いきなり両腕を広げた。

「マドモアゼル・ケントー」彼女はそう叫ぶなり、急ぎ足で近づいて来た。「もう、ジャックったら、マドモアゼル・ケントをこんなところでお引き留めして。わたしのところにまっすぐ連れて来もしないで」

ジャックは、シーリアは今しがた着いたばかりなのだというようなことをぶつぶつ言った。気がつくともシーリアは彼女に抱きしめられていた。

「わたしに電話をしてくれなかったのね、ジャック——わたしに電話しないで、そのままマドモアゼル・ケントを彼女の部屋まで連れて行こうとして！」

シーリアの目に、やや冷徹な黒い目の間に不機嫌な皺しわを寄せながら、ジャックがそっぽを向くのが見えた。そのとき彼女は、マダム・オリヴィエの歓迎の辞は彼女に対するものだったものの、その言葉はすべて息子に向けられたものであることに気づいた。

「ああ、マドモアゼル・ケント、あなたにもう一度会えて、わたしたちみんなとても嬉しいのよ」マダム・オリヴィエは続けた。「あなたがラ・マレットに戻りたいと思ってくれたことを、夫もわたしもとても喜んでるの。あなたはラ・マレットが好きだったものね？ わたしたちと一緒にごで過ごすのが好きだったでしょ？」彼女はそう言うと、シーリアの肩にやさしく手を置いた。「夫は絵を描きに崖に行ってるの。あの人が絵を描いたことは覚えてるでしょ？ それと、ジャックのことは覚えてた？ あなた、彼を見てすぐにわかった？ あなたがここにいたときに比べると、あの子はすっ

かり変わってしまったたでしよ？ あの頃はまだあの子、少年だったものね」

「それにしても、ちっともお変わりになってませんね」シーリアは言った。「どこにいらっしやってもすぐあなただとわかったたでしよ」

彼女自身驚いたことにその言葉に嘘はなかった。最初に会ったときからマダム・オリヴィエにはまったく老化の兆しがないように思えた。じきに、九年前にはマダム・オリヴィエの髪はグレーではなく、ダークブラウンだったことを思い出した。もともと彼女のがつしりした力強い体軀は昔のままだった。激しい気性を暗示する素早い身のこなしも。褐色で角ばっていて、ぶっきらぼうに見える顔も。もしかして彼女が着ている色褪せた綿のワンピースまで、シーリアが彼女を最後に見たときに着ていたものと同じかもしれない。彼女はそのとき、この同じ入り口に立って宣言するように言っていた。自分としては、ラ・マレットへの爆撃が始まるまでは、戦争が起きてるなんて信じないと。「それに、もしヒトラーが今この瞬間にもあの道まで来たとして」と彼女は言った。「わたしが彼に何て言うつもりかわかる？ こう言つてやるのよ。『わたしが持つてる物は三つしかありません。夫と息子とあのホテルです。どうぞあのホテルを召し上げてくださいな——わたしは夫と息子を連れて、ここを去りますから！』ってね」

マダム・オリヴィエは鼻で笑った。「わたしが九年たつても——九年くらいなものよね——変わつてないですって？ わたしはもうお婆さんよ。夫もわたしも年をとつて、何の役にも立たないわ。日がな一日座つて何もせずに、若い人に働いてもらつてる。それにマドモアゼル・ケント、あなただつてずいぶん変わったわよ。わかつてる？ 目以外はすべて変わってしまったわよ。それでもわたしにはあなただとわかつたけど。ジャックは——」

だがジャックはシーリアの靴を入り口の階段に置き、テラスへと歩きだしていた。

マダム・オリヴィエは当惑しているようだった。「ほら、見て」と彼女は心配そうに言った。「見てよ、あの子の様子……でもきつとあなた、うんと疲れてるわね。さあ、あなたの部屋まで上がって、支度ができたら降りてきて、わたしと食前酒をつき合つてちょうだい。で、何もかも話して。あなたには、海を見下ろせる、道に面した部屋を使つてもらうわ。以前あなたが使つた部屋だと思つけど、確信はもてないわ。なにせずいぶん昔のことだもの。あなたがどの部屋にいたのか、はっきりしないのよ。ジーン」と言つて彼女は振り向くと、さつきから玄関広間にいた黒髪の美しい若い女に言いつけた。「マドモアゼル・ケントの荷物を彼女の部屋まで持つて上がつてちょうだい」

若い女は外に出てくると、シーリアの靴を持ち上げた。シーリアは彼女のあとから、ほの暗いタイル張りの玄関広間を通つて、むきだしの木の階段を昇つていった。歩いていると、覚えのある別の匂いが漂つてきた。ニンニクやワインや濃厚でおいしそうな料理の匂い。石鹼の匂いもしていた。階上の廊下を通る際、膝を曲げてマイルにモップをかけていた女をよけて通らねばならなかった。女が顔を上げてにつこり笑つた。「<sup>ボンジュール</sup>こんにちは、マダム」老女のジュリエットでないのがわかり残念だった。廊下の突き当たりまで行くと、黒髪の若い女は部屋のドアを開けた。そして脇へ寄つてシーリアを中に通し、彼女の靴を運び入れて、自分は外に出てドアを閉めた。

まさにこの部屋だった。すなわちそれはシーリアが切望していた部屋だった。もつとも彼女が以前いた部屋ではなかったが。マダム・オリヴィエはそのことを百も承知だったかもしれないとシーリアは思った。

部屋を横切つて窓のところへ行き、日が射さないように閉じられていたシャッターを押し戻し、こ

じんまりした静かな港を見渡した。

去年の冬、長患いをしていたときに、夜の暗闇の中で熱にうなされながら、彼女はこの入り江を繰り返し見ていた。その入り江は今見ているものとほとんど同じくらい鮮明に彩られていた。一時は、この場所に居ることさえできれば自分はよくなるのだと自分に言い聞かせていた。つまり、それが病を癒やす唯一の機会なのだ。

それでも結局のところ彼女はロンドンで病気を治すほかなかった。だが夏が終わり、職場に戻っても、病気がまだ自分のどこかに巣くついているという思いがつきまとった。何か無力感のようなものやら、感情的に追いつめられることへの恐怖やら、何かを決める能力が欠落しているという感覚が、彼女から離れようとしなかった。何とかすべき問題がいくつかあったのだが、安静に過ごすという病弱な者の権利をしきりに主張しては、何か月も放置していた。時折、彼女は、病の床に伏していた間に自分がそういう人間に変わってしまったかのように感じた。もう二度と元の自分に戻ることはないのだ。

だが今、彼女はこうしてラ・マレットにいた。窓から身を乗り出して、深々と息を吸い込んだ。太陽のざらざらする光に目が痛み、顔が火照り、肌がちくちくした。

## 第二章

三十分後、シーリアは新しい白の木綿のワンピースに身を包み、洗って白くなった手足を意識しながら、また階下へ降りて、マダム・オリヴィエを捜し始めた。

彼女はどこにも見つからなかった。庭園には、青いワイシャツにカーキ色のショートパンツを穿き、松の木陰に座って読書をしている、黒髪の日焼けした男以外には誰もいなかった。おそらく一番マダム・オリヴィエが見つかりそうな場所である厨房にも、ボウルでサラダのドレッシングか何かをかき混ぜている見知らぬ中年の女性がいるだけだった。食堂は、一方に大きな窓のある天井の高い四角い部屋で、反対側はバーになっており、ジャックが一人で漁師の一団に飲み物を出していた。

彼は戸口にいるシーリアを見ると、手振りで示した。

「こっちへ来て何か飲みませんか、マドモアゼル・ケント？」

「わたし、マダム・オリヴィエを捜してたの」とシーリアは答えた。

「じきに帰って来るよ。何がご所望？ パステイス（アニスと甘草風味のリキュール）かい？ チンザノ？」

「じゃあチンザノをお願い」彼女はバーのところまで行くと、背の高いスツールによじ登るようにして座った。

彼は二つのグラスに飲み物を注ぎ、自分のグラスを持ち上げると、彼女のグラスにかちんと

ぶつけて言った。「乾杯！」そして、にやりとしながら杓子定規な英語でつけ足した。「はい、オ・イ・エス僕は英語を上手にしゃべります」

シーリアが笑うと、彼はフランス語で先を続けた。「戦時中は、もちろんここにもアメリカ人がいたからね。それに英国空軍の軍人も多少ね。それとあそこにいるマダム・ルースはカナダ人だ。彼女は僕に英語を教えてくれるんだ」

シーリアがあたりを見回すと、窓際のテーブルに座って編み物をしている若い女が目に入った。同じテーブルで、大柄でがっしりした金髪の男が、料理以外何も目に入らないといった様子で、一心に食べていた。

女が顔を上げて微笑んだ。彼女は年の頃二十五前後で、ひどく痩せており、華奢な肩に薄い胸をして、少女っぽい小さい頭は、きつい巻き毛にした黒髪に覆われている。薔薇色のシャツを着て、グレーのリネンのストラックスを穿き、足元は白いサンダルだった。

「あなたのお噂はかねがね伺っていますわ」と彼女は穏やかだがはつきりした声で、英語でそう言った。「あなたがいらっしやるのを楽しみにしてました」

ちようどそのとき極端に大きい車のクラクションの音が窓越しに聞こえ、部屋にいた者は一人残らず振り向き、女の向かい側の男に叫んだ。「バスが来たぞ、ムツシユー・ピエール。バスだぞ！」

まだ顎をむしゃむしゃ動かしながら男はさっと立ち上がり、唇を女の頬に押しつけて、部屋を飛び出していった。みな口々に男に激励の言葉を投げた。

騒ぎが治まるや、女が話を続けた。「ここ二年間ほとんど、夫以外の人が英語を話すのを聞いたことがなかったんです」



「ではあなたたちはフランスにお住まいなの？」とシーリアが尋ねた。

「ええ、もともと夫はフランス系のカナダ人なんですけど。戦争が終わったときに、夫がフランスに留まりたいと言って」

「マドモアゼル・ケント」とジャックが呼びかけた。「もう僕の妻には会った？ 彼女に会ってほしいんだ」

シーリアが彼のほうを振り向いた。「いいえ——あなたが結婚してることさえ知らなかったわ」

「僕の子どもに会ってない？」

「ええ」

「もうすぐ二歳になる娘がいるんだ。妻と娘を紹介したいんだけど」

カナダ人の女がまた英語で言った。「休暇のたびにここに来るといふのは本当なんですか、ミス・ケント？」

「以前に二度来たことがあるわ」

「まあ、わたしには理解できないわ——つまり、どうしてここなんですか？ ほかにいくらでもあるでしょうに」

「マダム・ルース」とジャックが言った。「僕の妻を見かけませんでしたか？」

「少し前、バスケット持って通り過ぎるの、見ました」と女が答えた。彼女のフランス語はひどくたどたどしかった。「パン買いに行った、と思います」

彼はグラスの酒を飲み干した。「ちよつと行って彼女を捜してくるよ」苛ついているような口ぶり  
でそう言うのと彼は唐突に部屋を出て行った。

女が、テーブルの向かいの空いている場所を指差した。「こちらへ来て、おかけになったら？」  
シーリアはスツールから滑り降りると、部屋を横切って彼女のところまで行った。

近くで見ると、女はきわめて虚弱そうであることがわかった。骨がひどく細くて、青白い繊細な肌をしている。編み物に忙しい指は、極端に細長く、骨が異常に柔軟そうで、外側にでも曲がりそうなくらいだった。

「ここにはもう長いこと滞在していらっしゃるの？」とシーリアは尋ねた。

「もう一カ月くらいになります。でも夫はもつと長いです。彼はここで働いてるんです」

「この村で？」

「ええ、彼はダイバーなんです。港から少し沖へ出たところの難破船で作業をしています。終戦間近に銅を積んだまま沈没したんですって」

「何かわくわくするようなお話ですね」

「そうなんです」と女も同意した。「でも、ここ一週間はミストラルが吹いて、作業ができなくて。それで夫は今日、仕事をするためにトゥーロンへ行きました」

「ではたった今、バスに乗るためにここを出て行った人がそうですか？」

「ええ——長い留守にならないといんですけれど。彼がいなくてとても心もとないんです。わたしのフランス語はひどくて、これ以上上達しないんじゃないかと不安です。でも何とかこれでやっていくしかありません。もうこの国に来て二年になるというのに。あなたのフランス語はお上手ですね」

「わたしは子どもの頃に習ったんです」とシーリアは説明した。「フランス人の看護婦さんがいて」

「それは運がよかったですね。ところで、ちょっとお訊きしていいですか？ あなたがどうしていつ

もラ・マレットにいらっしやるのか」

シーリアはしばらく考えて答えた。「そうですね、ここが好きだからかしら」

「それでも、行きたいと思えばどこへだって行ける時代なのに、わざわざラ・マレットに来るのはどうしてですか？」

「ただ好きだからですよ」とシーリアは繰り返した。「あなたはちがうの？」

「ああ、わたしはここにいたくなくちゃいけないからです。ほかに選択肢はないの。それにしても海沿いにはもつと美しい場所がいくらでもあるのに」

「そうですね、わたしもそう思うわ」

「それに海岸沿いを少し先へ行けば、ミストラルだって避けられますよ」

「ええ、知ってます」

「ではなぜなんですか？ このホテルがことのほかお気に入りだとか？」

「そうですね——少なくとも以前はそうだった。とはいってもわたしが最後にここに来たのは九年も前のことだけ」

「へえ……果たしてあなたはここの雰囲気を以前と同じだと思うかしらね」

シーリアはその言い方に何か引っかけかかかるものを感じ、彼女を訝しげに見た。「あなたはわたしがそう思わないとでも？」

「さあ、どうかしら。わたしは、以前このホテルがどうだったかを知らないから。ただ個人的には、ここはとて——」彼女はそこで言いよんだ。

「とても何？」とシーリアは先を促した。

「とても居心地が悪いの。様々な点で」女は編み物の柄を見て眉をひそめ、どうやらまずい出来だと思っているらしい所を、その奇妙なほど長くて柔軟な指で触っていた。「わたしは、夫と住める小さな家を見つけられたらとずっと願ってるんです」

「まあ、これといって特にやることもなく、際限なくホテルに滞在していれば、確かに退屈になるでしょうね。わたしはほんの短い休暇を過ごすだけけど」

「せいぜい楽しい休暇を過ごされるよう祈ってますわ」女の口調にシーリアはまた妙に挑発的なものを感じた。

だが今回はシーリアが何か言う前に、女が先を続けた。「あなたは どう思うかしら。何か気づくかしらね。わたしはあの張りつめた雰囲気にはとても耐えられないって、始終思ってますけど。いいこと、まず第一に、母親と息子の嫁が反目し合っていて、しかもみんなにそれを見せつけるんです。二人とも気難しくて、かなり自己中心的な人たちよ。それに気性が激しくて、歯に衣を着せないもの言いをして、自分たちだけの胸に納めておくということができない。あの状況なら本来はそうすべきでしょうに。それから若夫婦のジャックとクローデット。あの二人にはホテルを経営するということが、実のところ何もわかってない。何もかもがとても非効率的に行われるの。食事の時間はまちまちだし、料理は時々食べられたものじゃないわ。ホテルとしてはそうあるべき程度に清潔でもない。使用人たちはクローデットに憤慨しているの。それは単純にクローデットが彼らの扱い方をわかってないからで、使用人たちは彼女の言うことを聞こうとしません。で、もちろん義理のお母さんのほうはそうしたことにご立腹なんです。そこへ持って来てジャックが、わたしの夫の仕事に興味を持ち始めて、まわりが期待するほどにはホテルの仕事に精を出していない。それがまたいっそう彼らを憤慨させて

いて。なるほど彼らの言い分はもつともです。でもジャックにしてみれば、一生をこんな小さいホテルで無為に過ごす代わりに、いい暮らしができる千載一遇のチャンスなんです。それでも今このホテルがめちやくちやになりかけてることに疑問の余地はないので、全員頭に来てるんです。だから、よると触るといがみ合つてばかりいます。あなたはどうかわからないけど、わたしはそういったことには耐えられない……」彼女はいたってはつきりとそう言ったので、自分の英語はシリア以外の誰にも理解されないと思ひ込んでるのは明らかだった。「しばらくここにいたら、あなたはこの一切合切をどう思うかしらね」

シリアは何も答えなかつた。彼女は明確に後味の悪さを感じていた。その女は彼女に、あまりにも早く、あまりにも多くを語り過ぎた感じがした。それは彼女が友人だと思つてゐる人たちのことだと、その女も理解すべきだったのだが。ただその女もそこまで暴露するつもりはなかつたのに、思いもかけず話したい衝動に駆られてしまったのは明白だったので、異国の大きな部屋の中で、孤独で超然としていて、その実とてつもなくもろそうな彼女を見てみると、シリアはとても気の毒な気がした。

その女自身、話し終えた途端に自己嫌悪に陥つたようだった。うつむいて眉間に皺をよせて編み物に集中していた。じきにテラスで何かの物音がして、彼女は振り向いて窓の外を見た。「ムツシュー・オリヴィエだわ。写生から帰つて来たのね。きっとあなたのことを捜してると思うわ」

実のところシリアは不意に解放されたように感じ、立ち上がつて庭園へ出て行き、ジャックの父親と対面した。

彼はシリアの手を取ると、もごもごとやさしげな挨拶の言葉を言った。その不明瞭な発音と下が

った口角に、彼がいまだに義齒をつけるのを嫌がっていることがわかった。懐かしい青い瞳が彼女に向かつてやさしく微笑んだ。シーリアがいつも感じることだが、彼の態度にはほかの誰よりもやさしさがにじみ出ていた。彼は妻よりずっと年がいていて、痩せており、静かな歩き方をする、内気な男だった。今日の服装はいつもと同じような、襟なしの綿シャツに、色褪せたシヨートパンツだった。足元は履き古したエスパドリーユで、白いウールの縁なし帽をかぶっている。痩せた顔には深い皺が刻まれており、もともと色白なので日焼けはしておらず、ただ赤くなっているだけだった。

「外で絵を描いてたんだよ」彼は弁解するように言った。その口調には地方のなまりはいつさいなかった。陽光と松の香りに魂を奪われる前の、もうずいぶん昔のことだが、彼はパリジャンだったのだ。「きみがいつ着くかわかっていたら、駅まで僕が迎えに行きたかったのに」

「じゃあまだ絵を描いてるんですね？」とシーリアが訊いた。

「まあちよっと、時々ね」と言っただけは肩をすくめてみせた。「ほかにすることがないんでね。でもキャンパスは高価だし、終戦後やっとな絵を再開したんだよ。それはそうと一緒に食前酒でも飲まないかね」

ちよどそのとき、マダム・オリヴィエがテラス伝いに急ぎ足でやって来た。どっしりした体を勢よく動かしていたものの、着いたときにはいささか息が切れていた。

「この人を呼びに行つてたのよ」と彼女は説明した。「この人が崖に行つたらもう鉄砲玉で、わたしが呼びに行かないと帰ることなんて考えもしないってわかってたから。さあ、じゃあみんな飲み物をいただきますましよう。日陰に来て座つてちょうだい」

彼らは隅にある松の木の下のテーブルまで庭園を横切つていった。老人は飲み物を取りに家の中へ

〔著者〕

エリザベス・フェラーズ

本名モーナ・ドリス・マクタガート。別名義にE. X. フェラーズ。1907年、ビルマ、ラングーン（現在のミャンマー、ヤンゴン）生まれ。6歳の頃、英国へ移住し、ロンドン大学でジャーナリズムを専攻。1930年代にモーナ・マクタガート名義の普通小説で作家デビューし、ミステリ作家としては、「その死者の名は」(40)が処女作となる。英国推理作家協会(CWA)の創設メンバーとしてミステリの普及に尽力し、1977年にはCWA会長を務めた。代表作に「猿来たりなば」(42)、「魔女の不在証明」(52)など。95年死去。

〔訳者〕

稲見佳代子（いなみ・かよこ）

大阪外国語大学イスパニア語学科卒。訳書に『赤き死の香り』、『サンダルウッドは死の香り』（ともに論創社）がある。

かめ し まね  
亀は死を招く

——論創海外ミステリ 246

---

2020年1月20日 初版第1刷印刷

2020年1月30日 初版第1刷発行

著者 エリザベス・フェラーズ

訳者 稲見佳代子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1900-6  
落丁・乱丁本はお取り替えいたします